1
すべての人間が、生まれた当初から感覚を――ヌース（知性）より先に――用い、かくして彼らは必然的に、まず最初に感覚対象に当面する

2
ではそれは、どのような場所なのか、また、人がそこへ行き着くにはどうすればよいのか

3
さて一方、或る人たちはそこでどぎまってしまし、これらを最初で最後のものと信じて一生を送る

4
――彼らが最初にそこから飛び立ちうと試みたところのもの――

5 そして、これらにかわる苦痛と快楽を、一方は悪で他方は善だと考えて、片方を追いまえに、片方を忌避することによって鼓舞一真すするならば、それで十分だと彼らは信じる

6 そして、彼らのうちでも理性をもっていると自負する者たち（エピクロス派などは、まさにこれこそ知恵なのだと規定したのだが、その あり方まはまるで、他とのものたっぷり食べて身が重くなり、自然から翼を与えられているのに、高みへは向くなくなった鼓重な真たちのようである

7
――これらの問題について論じることが、まさに今、課題なのである

8
――技術が作り出すものも、自然によって成立したものも、そのそれぞれが――

9 さて、われわれが見ているように、有るとまわるものはすべて複合的なものであり、それらのどれか一つとして

10
単一的でないものである

11 そして、これらのそれぞれが、素材と形づくるものとから成り立っているのを見出して

12 ――というのも、諸元素の素材は、それ自体としては無形質であるのだから――

13 この形相はどこから来たのか、を、君は探するだろう

14 ――そもそも、諸元素の素材は、それ自体として無形質であるのだから――

15 さらにまた、自然によって成立したものも、それらのうちで多複合物と融合体とからとばれるものは、君はそれを、結合された諸要素と、それら結合された諸要素全体の上に置かれた形相とに分析することができるだろう

16 ――そもそも、諸元素の素材は、それ自体としては無形質であるのだから――

17 ――というのも、諸元素の素材は、それ自体として無形質であるのだから――

18 たとえば人間を魂と肉体とに、そして肉体を四つのもの（元素）に

19 ――これらのそれぞれが、素材と形づくるものとから成り立っているのを見出して

20 そのありさまはまるで、放浪を重ねた後に、ようやくふるさとへと帰り着いた人のようである

21 では、分別を魂に与えるのは何者か

22 それは必然的にヌース（英知）である

23 少なくとも真実の英知は

24 それとも、英知のかなたへさらに進まねばならないのだろうか

25 後のあとには、英知は

26 ――われわれからすると――

27 ただし、かものの は――の内に完全にとどまっているのだが、英知はむしろ多の内に存在するのである

28 ――いうのも、諸元素の素材は、それ自体としては無形質であるのだから――

29 ――これは、それ自体で美しいものである――

30 ――それは、それ自体で美しいものである――

31 ――それは、それ自体で美しいものである――

32 ――それは、それ自体で美しいものである――

33 ――それは、それ自体で美しいものである――

34 ――それは、それ自体で美しいものである――

35 ――それは、それ自体で美しいものである――

36 ――それは、それ自体で美しいものである――

37 ――それは、それ自体で美しいものである――

38 ――それは、それ自体で美しいものである――

39 ――それは、それ自体で美しいものである――

40 ――それは、それ自体で美しいものである――

41 ――それは、それ自体で美しいものである――

42 ――それは、それ自体で美しいものである――

43 ――それは、それ自体で美しいものである――

44 ――それは、それ自体で美しいものである――

45 ――それは、それ自体で美しいものである――

46 ――それは、それ自体で美しいものである――

47 ――それは、それ自体で美しいものである――

48 ――それは、それ自体で美しいものである――

49 ――それは、それ自体で美しいものである――